

尾原ダム建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

# 円満寺遺跡 I

(中世編)

2005年3月

島根県

仁多町教育委員会

## 例 言

1. 本書は、仁多町教育委員会が国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて平成14・15（2002・2003）年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果報告で、平成16（2004）年度に作成した報告書（第1分冊）である。なお、第1分冊は主に中近世編、第2分冊は主に古代編とし、二年次にわたって刊行する。
2. 本書に掲載した遺跡とその所在地は下記の通りである。  
まんまんじいすき  
 円満寺遺跡 仁多町大字佐白1025-2他9筆
3. 平成14年度・15年度の現地調査と同16年度の報告書作成は下記の組織で実施した。

（職名は当時）

調査主体者	仁多町教育委員会 教育長 卜藏良治		
平成14年度・15年度	現地調査		
事務局	14年度：伊藤敏朗（教育課長） 植田一教（教育課長補佐） 平田昭憲（社会教育主事）		
	15年度：植田一教（教育課長） 川西博司（主任主事） 平田昭憲（社会教育主事）		
調査員	野津 旭 杉原清一 藤原友子		
調査補助員	佐野木信義 藤原信幸 元山貴光		
調査指導	島根県教育庁文化財課 島根県埋蔵文化財調査センター 蓬岡法暲（県文化財審議委員） 錦田剛志（島根県立博物館）		
調査作業者	宍戸延大 安立一男 福岡光雄 伊藤正樹 藤原厚子 山根知雄 上田達司 社団法人中国建設弘済会（安部ヒサエ 小村ちえ子 長谷川トミコ 福岡新子 後藤彰子 磯田喬）		
平成16年度	遺物整理・報告書作成		
事務局	植田一教（教育課長） 内田裕紀（生涯学習係長） 平田昭憲（社会教育主事）		
調査員	野津 旭 杉原清一 藤原友子		
調査補助員	佐野木信義 伊藤正樹		
遺物整理	藤原厚子		
4. 年代測定、化学分析は次の方々に依頼し、その結果は本書付編に収録した。（敬称を略す）			
14C年代測定	川野瑛子 柴田せつ子 （大阪府立大学先端科学研究所アイントープ総合研究センター）		
鉄滓等の分析調査	村川義行（安来市体育文化振興財団和銅博物館）		

5. 現地調査および報告書作成に際しては、多くの方から有益な御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表わします。(敬称を略す)

鈴木敏一 西尾克己(島根県埋蔵文化財調査センター) 内田寛一 藤原成章  
(株)佐藤工務所 (有)内出工務店 国際航業(株) (有)ユーアイ設備  
(株)トーワエンジニアリング

社団法人中国建設弘済会(現場担当 金山浩司 事務員 渡部久美子)

6. 挿図中の方位は、国土地院座標系の値を示したほかは、調査時の磁針で示した。なお調査時の磁針方位は西偏角 $7^{\circ}18'$ である。高さは標高で示した。
7. 遺物の実測は調査員と補助員が行い、第2分冊の土師器壺の実測については、アイシン精機株式会社部分委託した。浄書は藤原が担当し、写真撮影は伊藤・杉原が行った。遺物図と図版中の個体No.は同じである。
8. 執筆は野津・杉原・伊藤で分担し、目次と文末に氏名を記した。編集は野津・杉原・藤原がおこなった。
9. 本書に掲載した出土遺物や調査図・写真などの記録資料は仁多町教育委員会が保管する。



# 目 次

## 〔第1分冊〕(中世編)

### 例言

- I 調査に至る経緯と経過
- II 位置と環境
- III 調査の概要
- IV 調査成果
- V まとめ

## 〔第2分冊〕(古代編)

### VI 調査成果 他

- 付編1 円満寺遺跡より出土木材および木炭の<sup>14</sup>C年代測定
- 付編2 円満寺遺跡 出土品の調査

## 〔第1分冊〕

### 例言

- I 調査に至る経緯と経過…………… (内田) 1
- II 位置と環境 …………… (杉原) 3
  - 1. 位置と地理的環境
  - 2. 歴史的環境
- III 調査の概要 …………… (野津) 11
  - 1. 調査方法
  - 2. 遺構・遺物
- IV 調査成果(中・近世)…………… (杉原・伊藤) 13
  - A. 上段地 …………… 13
    - 1. 遺構
    - 2. 遺物
  - B. 下段地 …………… 25
    - 1. 遺構
    - 2. 遺物
  - C. 上・下段地の総括的検討 …………… 32
- V まとめ…………… (杉原・野津) 35

## 挿図目次

図1 周辺の遺跡	5	図10 柱穴配置と焼土遺構	26
2 地形横断模式図	10	11 柱穴実測図(1)	27
3 調査区と水ノ手城跡	12	12 柱穴実測図(2)	28
4 地形図	14	13 柱根図	29
5 トレンチ図	15	14 下段出土遺物	30
6 上段(I区)遺構図	17~18	15 上段推定復元図	33
7-A ビット図	19~20	16 字十井平地形図	34
7-B 柱根図	19~20	17 トレンチ壁図	34
8 石石群と石段(II区)	21	18 中世景観イメージ図	36
9 上段出土遺物	22		

## 表目次

表1 近隣地域の主な遺跡分布	4	表3 上段出土遺物	24
2 出土遺物集計表	11	4 下段出土遺物	32

## 図版目次

Pl 1 水ノ手城跡と円満寺遺跡		7 下段の遺構(3)	
2 上段I区(1)		8 水ノ手城跡 十井平地区	
3 上段I区(2)		9 柱根	
4 上段II区		10 上段出土遺物	
5 下段の遺構(1)		11 下段出土遺物	
6 下段の遺構(2)			

# I 調査に至る経緯と経過

## 1. いきさつと経過

円満寺遺跡は斐伊川本流から約100m、後背山頂の「水ノ手城跡」から下った南麓山裾に位置し、この区域は国の行う尾原ダム建設計画地内であり、平成5年の島根県埋蔵文化財調査センターの分布調査により遺物の散布地及び寺院の一部とされていた。

仁多町教育委員会は平成14年度と平成15年度にわたり当該調査区域4600㎡の発掘調査をおこなった。検出した遺構並びに出土遺物から中世の寺院関連地または城跡ならびに古代の祭祀に関わる遺構が検出され、複合遺跡であることが確認された。

調査初年度は川上の2500㎡、次年度は川下の2100㎡の調査をおこなうこととし、平成14年7月29日から調査を開始した。

平成14年度では調査区域上段の寺跡付近において、門柱と思われる堀立柱とそこから延びる構状柱列等、また寺跡下段付近からも巨大な堀立柱列、そして調査区中央部からは近代の麻蒸炉状七坑を検出した。そして祭祀の場の一端とみられる土器溜り遺構を検出した。

この土器溜り遺構から出土した土器片約36000点の大部分は、その様式から7世紀後半から8世紀初めの土師器、須恵器であり、上馬や赤塗り土器も含まれていた。

平成15年度も土器溜り遺構を継続調査し、また調査区の一部では下から寺の壇へ通じる石段遺構を検出した。

この間において主として地元の人々を対象に現地説明会を開いた。質問も多くあり、参加者はふるさとのほろかな古代に想いを馳せていた。

なお残っていた柱根からの年代測定や赤色泥土及び伴出した製鉄遺物については別途に専門的分析鑑定を依頼し、格別の成果を得た。

以下経過を列記する。

平成14年6月17日 今年度調査区地形測量（～7月5日）

7月12日 表土除去作業開始（～7月25日）

7月29日 調査開始

9月25日 調査指導会

運岡法暲（島根県文化財保護審議委員）

西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）

伊藤徳広（島根県教育委員会文化財課）

坂本諭司（木次町教育委員会）

11月6日 調査指導会

運岡法暲（島根県文化財保護審議委員）

- 西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）  
 坂本論司（木次町教育委員会）  
 錦田剛志（島根県古代文化センター）
- 12月16日 平成14年度現地調査終了
- 平成15年5月12日 土器溜り部分現地調査再開
- 7月15日 現地調査開始
- 7月16日 表土除去作業開始（～8月20日）
- 8月27日 調査指導会  
 蓮岡法暉（島根県文化財保護審議委員）  
 原田敏照（島根県教育委員会文化財課）  
 西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）  
 熱田貴保（同上）  
 坂本論司（木次町教育委員会）  
 錦田剛志（島根県古代文化センター）
- 9月3日 遺跡視察  
 和田 萃先生（京都教育大学教授－古代史－）他3名
- 9月26日 調査指導会  
 蓮岡法暉（島根県文化財保護審議委員）  
 原田敏照（島根県教育委員会文化財課）
- 9月30日 現地説明会  
 約30名参加
- 11月19日  $^{14}\text{C}$ 年代測定依頼（大阪府大、先端科学研究所）
- 12月12日 15年度現地調査終了
- 平成16年3月10日 羽口関連、鉄滓の分析 依頼（和鋼博物館）

## II 位置と環境

### 1. 位置と地理的環境

円満寺遺跡は島根県仁多郡仁多町大字佐白1023番地・他に所在し、この度のダム計画に伴い廃墟となった前布施集落のほぼ中央に位置する。

この地点は斐伊川本流が大きく蛇行するあたりの北岸部で、北に隣接する台地上の上布施集落から急降下する山麓の下端部にあたる。当該遺跡は幅狭で落差の大きい3段から成る集落跡の一部で下段は河岸段丘の一部とみられる。

### 2. 歴史的環境

#### 1) 占代の布施郷

当該遺跡の所在する区域は、古く『出雲国風土記』に所載の仁多郡4郷の一つ「布勢郷」のうちでありその南端にあたる。地名の起源は「大神の命の宿りましし処なり、故、布世という」「のち布勢と改む」と伝えている。しかしその範囲は広く、拠点集落も複数分布していたと思われるが、最も近いところとして上布施地区が想像されよう。

#### 2) 中世の布勢郷

鎌倉期以降文書等に散見される布施(勢)郷地名を挙げると、建長元(1249)布施郷社・地頭、文永8(1211)布施郷地頭、建武元(1334)後醍醐天皇より郷中の出畑を寄進<sup>3)</sup>などがある。

これらはいずれも郷中心部あたりとすれば、字佐白から八代・中村あたりであろうか。なお布施地区は中世末ごろ上布施、前布施(現仁多町大字佐白区域内)及び下布施(現木次町城内)の3区分となった。また中世末に近く城館址が上布施に所在し「皇国地誌」<sup>2)</sup>によると水ノ手城と呼び布施某居城と記し、下布施地内には「下布施館」があり、別に森脇氏居城と伝えるところもある。

#### 3) 円満寺と布施氏

文書資料や文献と、この度のダム計画による集落移転に伴う事前の民俗調査から関連する金石文の年銘等を列挙してみる。

天文9(1540)	“出雲州衆次第・連名”布施氏	竹島奉加文書 <sup>3)</sup>
弘治3(1557)	“円満寺住職之事”	(三沢)為清 覚融寺文書 <sup>4)</sup>
享保2(1717)	『雲陽誌』“前布施・円満寺”の項 <sup>5)</sup>	
寛政9(1797)	円満寺喚鐘 銘	『尾原の民俗』 <sup>6)</sup>
寛政11(1799)	円満寺石段 刻銘	“ ” “ ”
文化8(1811)	円満寺水盤 刻銘	『尾原の民俗』 <sup>6)</sup>

文政5 (1822)	円満寺門前地蔵	刻銘	〃	〃
天明5 (1785)	円満寺鎮守宮	棟札	〃	〃
万延元 (1860)	〃	〃	〃	〃
文化14 (1817)	“前布施・周苑” (堂守か?)		玉雲寺過上帳 <sup>※7</sup>	
慶応4 (1868)	“円満寺堂守坊ば”		〃	〃
明治8 ~ (1875~)	“水手山 (要害)”		皇国地誌 <sup>※2</sup>	

これらによって若干の憶測をすると次のようである。

- ・円満寺の始まりは不明であるが、16世紀中ばには領主三沢氏の下に存在し、改めて住職職務を確認している。これは従前の木末寺関係に移動があったことを示すのであろうか。
  - ・円満寺は後背山頂に地域領主とみられる布施氏の拠点である水手城があり、また西隣接には宇殿迫の地名があるなどからすると、これらは一連の地割り配置の可能性はある。
  - ・円満寺は近世に移ると常住住職のない期間もあり堂となって近世末には“堂守”によって維持されていたようだ。そして近年では集落集会所に変容していた。
- なお、この項目については、この度の調査を踏まえて改めて検討したい。

#### 4) 近隣地域の主な遺跡分布

ここに報告する円満寺遺跡を中心に、仁多町及び木次町の一部にかけて主として斐伊川沿いについて、製鉄遺跡を除く主な遺跡の分布を図示する。

表1 近隣地域の主な遺跡分布

遺跡 No	名称	種別	主な時代	概 要 等	文献等
Q 1	尾門横穴墓	横穴墓群	古墳	人骨・刀子・土師器	※8
Q22	半田遺跡	散布地	縄文	土器	※8
Q37	下布施氏館跡	城館	中世	郭・堀切・宋銭	※9
Q52	家の後遺跡Ⅱ	散布地	縄文・中～近	住居跡・土器埋設・配石碁	※8
Q53	風の内遺跡	散布地	弥生	住居跡・土器溜まり	※8
Q56	川平遺跡	轉別	縄文	土器・石器等	※8
Q69	下布施横穴墓群	横穴墓	古墳	5穴・大刀・須恵器	※8
Q75	家の土遺跡	発掘	古代	土馬・半椀土器・須恵器	※8
Q110	北原本陣遺跡	散布地	縄(弥・古・近)	縄文土器埋設・平地式建物跡・土偶・耳飾	※9
5	下野倉遺跡	散布地	縄文	土器・石器・磨刻産	※10
17	深谷古墳群	古墳	古墳	8基 円墳か	〃
19	上布施横穴墓群	横穴墓	古墳	人骨・土器	〃
22	穴廻1・2号墳	〃	〃	2号前方後方墳・1号円墳・各横穴式石室	〃
24	八郎塚横穴墓群	〃	〃	2群 後背マウンド有り	〃
42	水手山城跡	城館	中世	伝布施氏居住	〃
43	佐白城跡	〃	〃	伝桑島氏居住	〃
44	三沢城跡	〃	〃	三沢氏城館(県指定史跡)	〃
36	長迫遺跡	散布地	縄文	土偶3・倒立伊賀土器	〃
60	布成城跡	城館	山世	伝布成氏居住	〃
61	林原古墳(遺跡)	古墳(散布地)	古墳・縄文	横穴式石室・土偶	〃
106	家の上古墳群	古墳	古墳	1～4号墳	〃
107	正覚古墳群	〃	〃	1～4号 2基2群構成	〃
110	上布施・畑1古墳群	〃	〃	円墳古基	〃
126	下野倉古墳群	〃	〃	円墳2基	〃
131	西尾尾遺跡	城館	中世	竈・虎口	〃
134	城廻横穴墓群	横穴	古墳	6穴(2穴3群構成) 人骨・須恵器	〃
135	栗田遺跡	集落・城跡	縄文～近世	建物跡・埋設土器・横穴石室・川原跡	※11
139	時山山横穴墓	横穴	古墳	人骨・土葬	※10
144	円満寺遺跡	散布地・川跡	縄文～中世	集石・土器溜り	〃
146	家の鷺目遺跡	散布地・川跡	縄文～中世	集石・土器溜り	※11

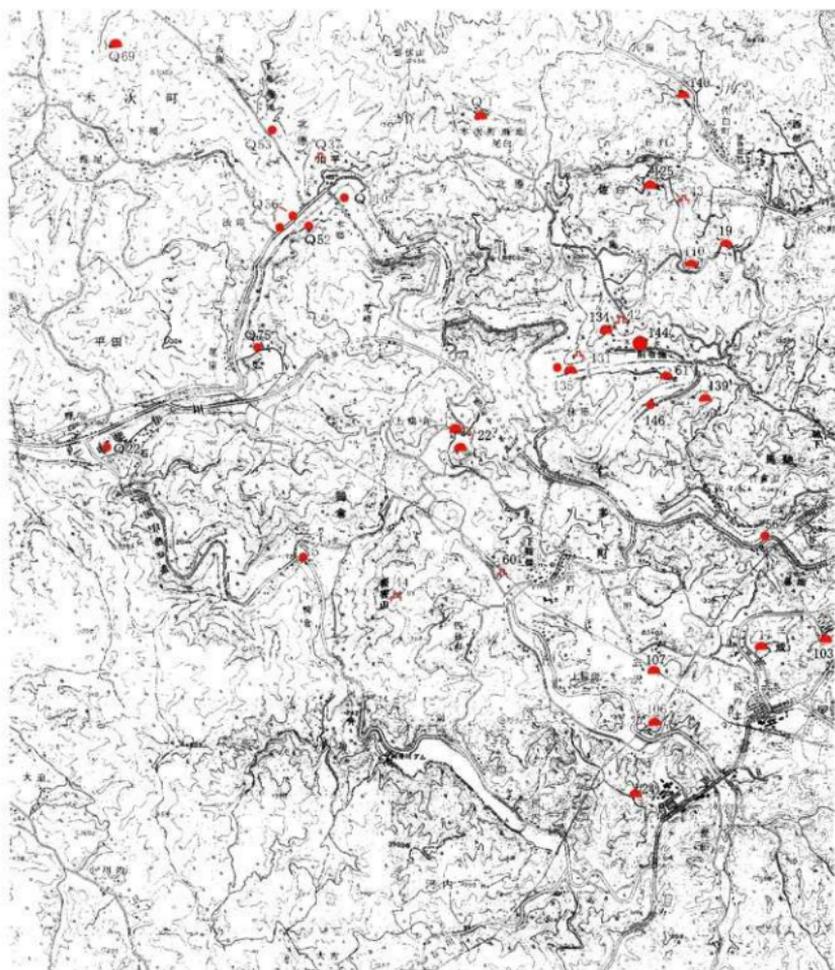


図1 周辺の遺跡

(1 : 38,000)

**縄文時代：**最近の発掘調査により斐伊川中流域に濃密に分布することが分かりつつある。従前より周知されていたのは平田遺跡の中期の土器、下鴨倉遺跡の前期から後期にわたる多様式の土器や線刻罫、暮地遺跡の後期前半とみられる倒立併置埋甕や土偶3体等であったが、近年に至り、原田遺跡・北原本郷遺跡・川平遺跡・家の後Ⅱ遺跡などで後～晩期を中心とし晩期の埋設土器遺構や配石墓などが多く検出され、斐伊川沿いの段丘上には晩期に至るまで縄文集落が展開されて

いたことが分かりつつある。

**弥生時代：**斐伊川上～中流域における弥生時代の遺跡は、最上流部の横田盆地に中期以降顕著で山陽側の影響が云われているが、当該範囲においてはほとんど知られていなく、前～中期の空白地帯であった。近年の調査で主として中期にあたる塚ノ内遺跡・暮地遺跡などで小集落建物跡や土器石器類が検出されたが、やはり分布は希薄である。後・末期以降古墳時代前期の遺跡は、広くみると上流の横田盆地では漸次増加してゆくが、図示範囲では明確ではない。

**古墳時代：**集落、建物跡などについてみると、かつてほとんど知られていなかったが、近年に至り北原本郷遺跡やその近隣で検出されつつある。墳墓についてみると前～中期古墳は斐伊川上流域では未だ知られていないが、分布調査で中～後期かとされるのは上布施・畑山古墳群で山稜上にあり、直径15mから8mほどの円墳4基から成っている。

その他の図示した古墳の多くは谷あい地帯の低丘陵上に営まれているが、林原古墳と原田古墳は丘麓の河岸に近い低地に所在する。これらの大多数は後期後半から末期に相当するものとみられ横穴式石室を主体とするものが多く知られている。なお穴観2号墳は仁多郡唯一の前方後方墳である。

横穴墓も顕著で、その多くは数穴の群をなしている。丘陵上高く尾根からわずかに下った山腹に営まれている。殿迫横穴墓群は並んだ2穴が単位となり、年代を経ながら上方から下方へ3単位の構成である。八頭塚横穴墓は大きく2群から成っているが、いずれも丘頂にマウンドが並ぶことから、それが小字地名となったと伝えられている。

特異な埋葬例としては、時仏山横穴墓が挙げられる。熟年女性1人がうつ伏せに埋葬されていたが供献土器は皆無で勾玉小玉など玉類のみであった。

この地域は一般に人骨の遺存状態がよく、被葬者の性別や年齢をはじめ様々の情報を知ることが出来、それぞれに検討されている。例えば男女合葬の場合頭位を逆に置く例が多く、図示範囲では殿迫横穴墓群などがそれである。この地方の横穴墓は6世紀末から7世紀中ごろの間に集中し、広くみると風上記所載の“郷”ごとに分布のまとまりがあるようだ。

**奈良・平安期：**仁多郡にあっては、古代仁多郡家の所在した、仁多町大字郡村地区に遺跡が濃密に分布するが、それから外れると希薄である。しかし律令期の土師器片はわずかながら広域にわたって認められる。

特に斐伊川の川辺での祭祀跡として、家の上遺跡では土馬、手捏土器、湧水路脇の石組みなどが検出され、家の脇Ⅱ遺跡では川原に近く谷水の流下部に集石と土器溜まりがあり、土師器や須恵の高坏、蓋坏や煤の付いた甕、かまどなどが散布していた。

城館跡：中世で特に目立つのは城替関係である。出雲での主要な豪族三沢氏の本拠三沢城やそ

の出城である布広城をはじめ、その麾下や主要家臣の拠点が点在する。最も近い水手城跡は斐伊川下流域に対する防備とみられ、布施氏が拠り、その関連の西尾社惣などがあり、また一時期尼子氏配下の森脇氏が拠ったのは佐白城で、仁多郡への人口部にあたる。

これらの多くは15世紀後半から16世紀初頭あたりとされ、各城下には集落が展開し、当該の円満寺もその一つである。そして近世へと発展する。

## 註

※1 『日本地名辞典—島根県—』(岩波書店) P 577 “布施郷”の項による

(抄出)・建長元年6月の「竹築社造営所注進状」(北島文書)には遷宮儀式の流鏝馬15番の第4番に「布施郷社合赤江郷、山代郷、福富保、此等地頭勤之」と。

・文永8年11月の「関東御教書」(千家文書)三月会相撲舞御頭役結番20番には第18番の相撲頭に「布施郷五十五反三百歩 神保二郎」、舞に「布施社八十七反 神保小四郎」とある。

・建武元年7月5日には後醍醐天皇より当郷中村の田畑が祭料田として高田寺大権現へ寄進(高田寺根元録)。

・「フセ」表記の変遷

布世→布勢(山雲国風上記)、布施(上記文書等)、上布施・前布施・下布施(近世の村名)

※2 皇国地誌【佐白村】 明治8年 筆記本 島根県立図書館所蔵

水手山(俗ニ要害ト云フ)城墟東西三十間 南北四拾間 村ノ南方字要害ニアリ

年歴不詳 布施某居城、城址タルノ謂ヲ傳ヒ称シニハ、後世要害ト云フ

城址南向キニニノ地形アリ 石礎等埋リシカ見ヘス

天神岩嶺(一名殿迫ノ峯ト云フ)城墟東西十間 南北七間 村ノ南字天神岩山ニアリ 天文ノ年中

森脇山城守家貞居住スト云イ舊記等不傳故事不詳 刀池 殿迫ニアリ 古城キ森脇氏居住ノ壘ヲヲ洗

フ池ナリシト云傳ヘ 今ニ池形アリ 人民此池障リトモハ洪水大雨アリ人近寄ラス

※3 「竹生島奉加帳」天文9年 竹生島宝厳寺文書(『尼子氏関係史料調査報告書』2003年 広瀬町教育委員会刊による)

「江州竹生島造営之御奉加門人数之事」

刑部少輔殿 國久 式部少輔殿 誠久

下野守殿 久幸 新四郎殿 久茶 彦四郎殿 清久

次良四郎殿 詮幸 小四郎殿 久尊 又四郎殿

御一族衆

宍道八郎殿 鞍智右馬助殿 宍道九郎殿 <sup>奉公ノ末</sup> 朝山安芸守殿

出雲州衆次方不問

遍岐五郎右衛門尉殿 三澤三良四郎殿 馬來左衛門大夫殿  
 廣田太良五郎殿 馬田左近源殿 (以下27名略 統いて)  
 三刀屋新四郎殿 布施平左衛門尉殿 鳥橋氏三書之東加理 三澤三郎左衛門尉殿  
 伊肆冊作馬殿 多岐次郎左衛門殿 田儀殿  
 赤穴右京之助殿 比田長門守殿 牛尾 北六郎左衛門殿  
 牛尾大石殿 同八所殿 同米田殿 同金尾殿  
 下布施殿 同中村殿 巳生殿 野原殿  
 白紙殿 多良加 深野殿 耳 東殿 (以下16名略)

留田衆次方不問

これに証立す  
 湯原次良右衛門尉殿 同 弥次郎殿 同 又右衛門尉殿  
 馬來宗三郎殿 高尾備前守殿 同 新右衛門殿  
弘和堂立  
 河本左京源殿 (以下30名略)

右此御人数 御奉加之儀 民部少輔殿 被仰出候  
 亀井太良左衛門尉 子形

天文九年八月十九日

竹生島白尊上人 御房 末

この文書中、布施姓は3人あり、次のような順位となっている。

出雲州衆	68人中	34位	布施平左エ門尉殿
		46位	下布施殿
		47位	中村殿

※4 『三沢為清書状』 覚融寺文書 『新修島根県史 史料編』より

布施郷門満寺住持職之事申合候 於寺役等之儀者 如先例

可被仰付候 恐惶造言

弘治三

九月廿四日 (三沢) 為清 (花押)

延年院

薰首座 侍者禪師

※5 『雲陽誌』(享保2年) 『日本地誌大系雄山閣版』による。

前布施

圓濟寺 禪宗月光山と号す、本尊阿彌陀如来像俊春口の作、開山年代しれず、鎮守八幡の祠あり、縁起なければ由緒分明ならず

(石造物)

(41) 円満寺樂鐘

雲州仁多郡前布施村月光山

円満寺半鐘老口

施主

馬庭亦右衛門

川井村 幸助

植田彦兵衛

植田善藏

植田利右エ門

為 夏希妙大信女

植田和吉

安部総太

植田忠兵衛

植田彦左エ門

小畑幸助

維時寛政九年春<sup>丁巳</sup>

夷則鼓且

願主

植田傳吉

(42) 円満寺石段 (耳石)

(右) 岩山口左衛門

施主 同 利右衛門

植田忠兵衛

同 彦右衛門

(左) 寛政十一巳

本願白休

未八月 日

同 傳吉

施主 植田善藏

同 栄藏

(43) 円満寺水盤

文化八 四月

施主 堂 本  
(カ) (カ)

(44) 円満寺下六地藏

(1) (無)

(2) 安部万藏<sup>(カ)</sup>

(3) 文政五年

月吉日

(4) \_\_\_\_\_ 右衛門

(5) 施主

(6) (無)

(棟札)

K84

(表)

天明五<sup>丁巳</sup>年七月七日

奉建立月光山圓満寺鎮守

( ) (字)  
(カ) (カ)

導師運降山覺應寺執事

(裏) 秋葉三尺坊大権現

K85

(表) 萬延元年八月廿一日

奉再建立月光山圓満寺鎮守 老宇

導師 運降山覺應寺宏誓堂

(裏)

庄屋 栄四郎 大上 三沢村  
山五郎

権葉 三尺坊大権現 本願 植田市右衛門  
佐藤亦藏

年寄 梅五郎 木挽 中村  
亦市

- ※7 『玉雲寺過去帳』 大字佐白 玉雲寺藏 ( )は筆表の註  
 ① 周庵道圓信士 前布施 周庵支 (僧籍名か)  
 文化14年11月14日  
 ② 戒林妙香信女 前布施 円満寺守坊ば (屋号 西)  
 慶応4年4月10日

- ※8 『下布施横穴墓群調査報告書』 木次町教育委員会 2002年  
 ※9 「オロチのいぶき特別号2」 島根県埋蔵文化財センター 2004年  
 ※10 仁多町教育委員会 所管 「島根県遺跡調査カード」(控)による  
 ※11 『家の脇・原田遺跡・他調査報告書』 島根県教育委員会 2004年

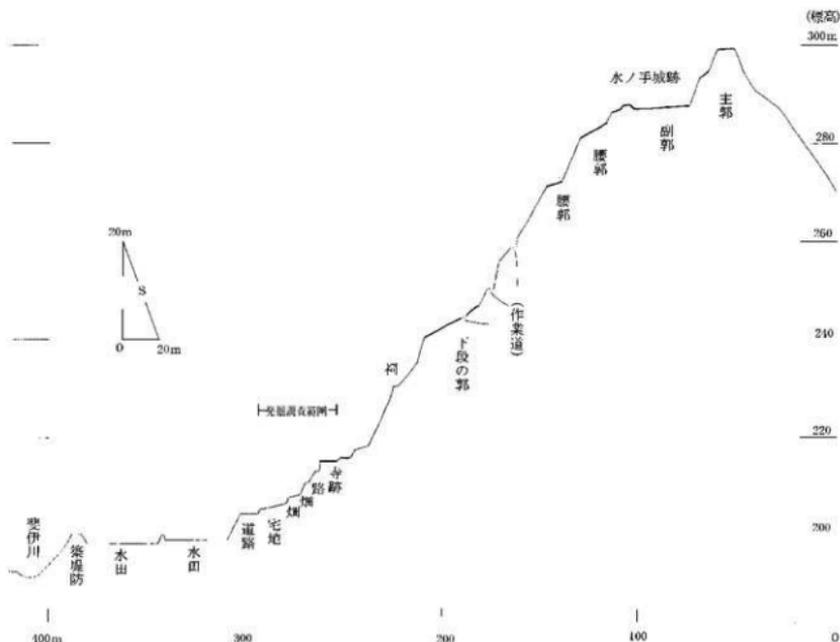


図2 地形横断模式図

### Ⅲ 調査の概要

先年鳥根県埋蔵文化財調査センターの行ったトレンチ調査により要発掘調査地とされたこの地は、西に向って流れ下る斐伊川本流から北側へ約100mの距離で、後背山頂の「水ノ手城跡」から下った南麓山裾にあたり、尾原ダム建設に伴う付替道路にかかる4600㎡を調査対象地としたところである。

#### 1. 調査方法

- 1) 調査区に5mメッシュを組み、川に沿う方向を数字で、川に直交する方向をアルファベットの表記する。以後、区の名称は区の南西杭をもってその区の名称とする。
- 2) 作業工程、排土処理等を勘案し、平成14年度は川上の2500㎡を、15年度は川下の2100㎡を調査区とし、漸次、発掘調査を進めた。
- 3) 調査区外ではあるが、本遺跡は小字地名や立地からみても後背山頂の「水ノ手城跡」に関連するものと考えられ、本遺跡を含む城域と思われる約30000㎡を委託により地形測量を行った。

#### 2. 遺構・遺物

- 1) 調査区上段の寺跡付近では、門柱かと思われる掘立柱とそこから延びる櫓柱状列等を検出した。寺跡下段からも巨大な掘立柱列が、調査区中央部では麻蒸炉状土坑が、平成15年度調査区では下から寺の段へ通じる石段状遺構を検出した。調査区東端では巨石に囲まれて水が滲み湧き出る半湿地状の場所を選び水辺の祭祀の場としていたであろう土器溜り遺構を検出している。
- 2) 寺跡の段、下段の柱列部、石段状遺構付近からは、量のごく僅かであるが、天目茶碗等、中世を示す遺物が出土している。

祭祀土器溜り遺構から出土した土器片の大部分は、その様式から7世紀後半～8世紀初めの土師器、須恵器である。土師器では人甕、土製支脚等、煮炊き道具が、須恵器では高坏、蓋坏、高台付坏、横瓶等が出土している。その他特殊遺物としては、土馬、高台付木製丹塗り椀、水晶片、浜磯様小石、手捏ねのミニチュア土器である。

円満寺遺跡出土遺物の内訳は次のようである。

表2 円満寺遺跡 出土遺物集計表

(取上げ破片数)

土 師 器						須 恵 器					中近世	その他	
甕・壺	甗	土製支脚	土馬	その他	不明	蓋・坏	甕・壺	高坏	高台坏	その他	不明	陶磁器	その他
33663	178	532	1	791	70	317	249	87	92	115	195	69	158
35235						1055							
36517													



## IV 調査成果（中・近世）

近世まで存続した寺院は、その後寺僧もなく堂宇となり近年に至っては改装されて地区の集会所へと変貌した。そしてこの度の集落移転に伴って解体され、建物敷地に大きな穴を掘って腐材や芥類を埋めてあり、遺構面を大きく損壊していた。寺院に關与する遺構は大きく上段（標高214.5m）と字寺坂の小路を挟んで下方の下段（標高約206mあたり）の、いずれも山麓帯地形に認められた（図3）。

以下、上段遺構及び下段遺構とに区分し、下段西端部の古代の土器溜まり遺構に区分して記述する。

### A. 上段地（円満寺跡他）（図4.5.6）

#### 1. 遺構

調査着手時は寺院跡敷地の最終状況である。ほぼ東西方向のやや弧状をなす、坂路（寺坂と呼ぶ）の頂部から北へ登る13段の石段が正面路で、これを登ると約15m略方形の寺域である。南及び西側面は近世の石垣で囲み、石段下の脇には地藏尊のおかれた台座部がつくられていた（上段Ⅰ区）。

この寺跡の西隣接は緩斜して張り出す畑地であり、南端は巨石で崖状をなしている（上段Ⅱ区）。最近の測地図から見ると寺堂の最終建物は東西に長い2.5間×4間であるが現地に遺っていたのはその前面約1m位置に長さ90～95cm（3尺）の柱状切石6本の列で全長5.7m（約3間）を測る。この石列は寺堂正面前端のカツラ石（葛石）と判断される。石垣の天端近く同様の柱状石が7本ほど散乱していたが、これは石垣上に設けた塀の土台石と理解される。そのほかには建物の土台石、又はその据えられた跡などは攪乱されていて何らも遺っていなかった。

調査区東端の山際近くには3×3mほどの低い台状土盛りがあり中央に直径75cmほどの円形で深さ約1mの石積み井戸が造られていて、さらに外周には2.5×2.5mで歪な四辺形をなす掘立柱の柱穴が囲んでいる。これは調査区東隣接の民家に關与する近世のものと思われる。

以上のように上段Ⅰ区の現況地面は、石垣によって区画される厚さ70×90cmの盛土によって造成された第2次の敷地面である。また旧畑地である上段Ⅱ区には近代のサイロ跡が2基認められた。

上段Ⅰ区で第1次面盛土を除いた第1次面は標高213.7～214.0mで寺石段より東がやや湾入する地形で、このあたりから調査区内の中央から東寄りに数多くの大小柱穴状ビットが検出された。

特に中央山寄りには柱根の残存するものもあった。

また調査区東隅の前端崖状の旧表土面には丸太材12本以上敷き並べた圧痕がみられ、その上に後方山麓部を掘削したと見られる黄色やや粘質の地山土が上に敷き詰められた状況で検出された。これは大がかりな敷地等の改変工事の工法の一つで軟弱地盤地での技法の一つであろう。

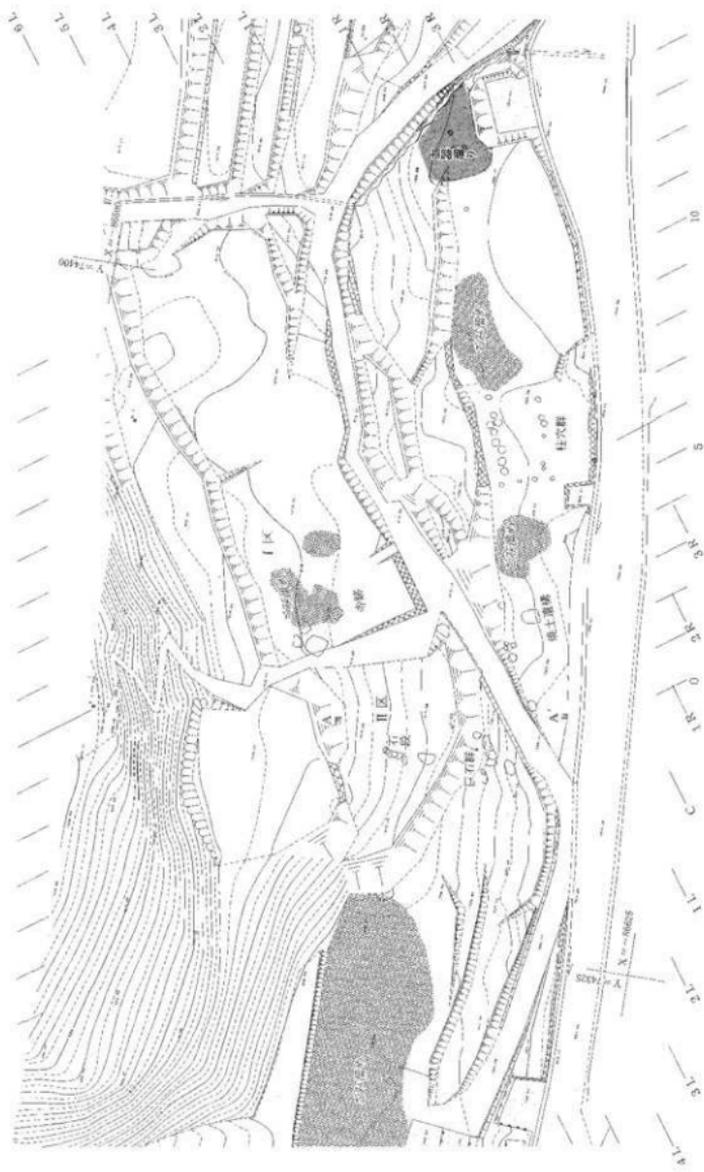


图4 地形图

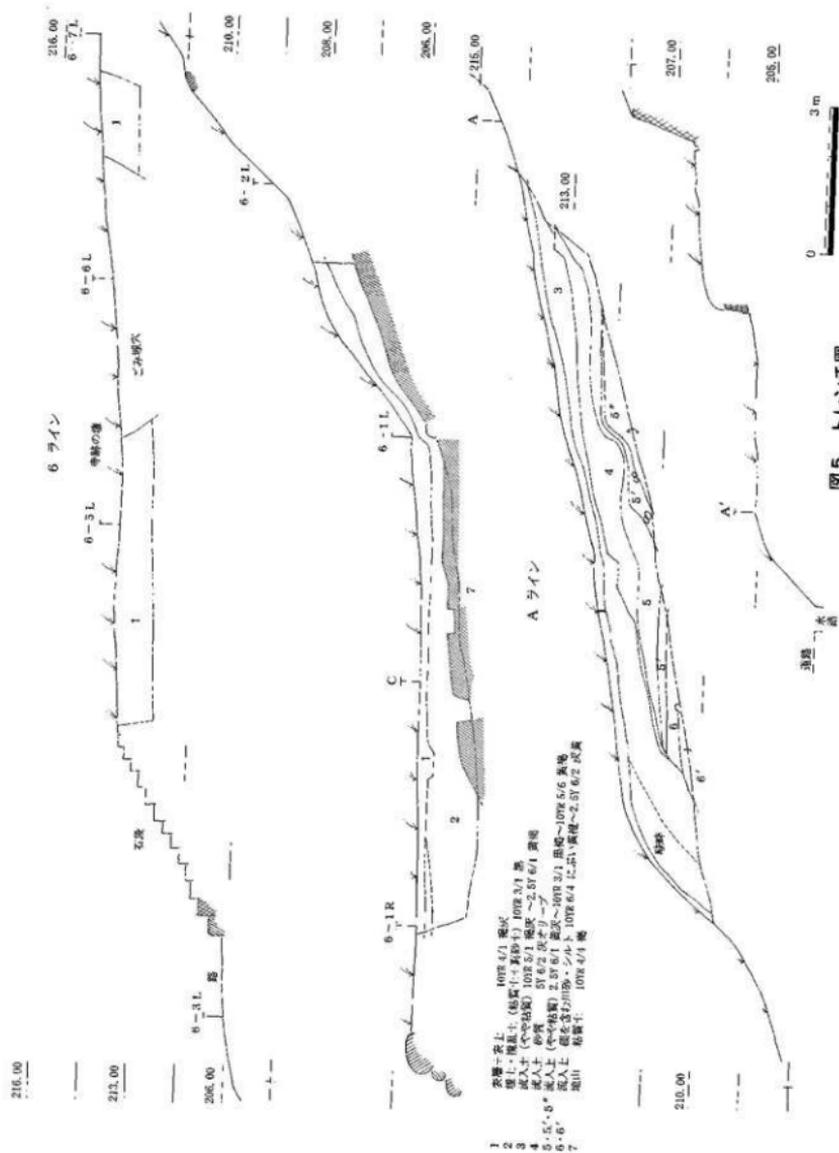


図5 トレンチ図

柱穴状ピットは深さ70～50cm、ピット底の直径は15～25cm程度のもが多いが最も大きいのはP4、P5で、上端径1.2cm、底径30～50cm、現在の深さ70～80cmでそれぞれ樹皮の残る柱根部が嵌ったまま残存していた。柱根の遺存するのはこの他にP2、P3がある。

柱穴の規格性が判るものは少なく、唯一P1、P10の屈曲する1本のラインのみである。

この柱穴列の配置は上段のフラット面のほぼ前端を結ぶもので、湾入して山裾との間の最も狭い位置に最も大きいP4、P5が2.4m（8尺）の間隔で並び、それから若干下降しながらハ字状に東西へ延長している。この柱列の北側後背部はフラットな面が広くなり、特に東側は、調査区外の民家宅地跡へと続く。

なおP4、P5にはそれぞれ後方1.3m位置に小さい柱穴P4'、P5'が伴っており、主柱に対する副柱又は支えの斜柱であったかとみられ、この位置が中心となるもので、下方から見ると、最も奥まっところのひときわ太い柱であり、門柱と推定される。そしてこれから東西へ連なる柱は塀の骨格をなす柱であり、全体として中世城郭の城戸口（虎口）構造となっている。因みに各柱穴ピット中心の間隔は次のようである。

	間 隔 (m)	尺 換 算 (概 数)
P1～P2	7.48	24.68 (4間)
P2～P3	5.60	18.48 (3間)
P3～P4	1.80	5.94 (1間)
P4～P5	2.30	7.59 (1間 1/4)
P5～P6	2.00	6.60 (1間)
P6～P7	4.30	14.19 (2間 1/3)
P7～P8	3.00	9.90 (1間 2/3)
P8～P9	1.92	6.34 (1間)
P9～P10	2.00	6.60 (1間)
	30.40	

このように柱間距離は規格性に乏しいが、これらを結ぶ間に小柱を置いたと考えると例えば板塀の様な構造が思われる。(図6)

なお、この門を入ると左手山際には上面の平らな台状の石3個がある。大きさ1.1×1.1m略方形のものが最も大きく、60×50cmのものまであり、いずれも山石で地山中にあったままの状態で見られていたものようだが、使途については何らかの台座が否か不明である。

このように上段Ⅰ区の第1次面においては、寺院跡は確認できず、むしろ中世城郭の虎口部の塀を伴う門構造と見られる遺構を検出する結果となった。上段Ⅱ区は表十(耕作十等)を除くと黄色地山で上方は緩斜するフラットであり、南前方は岩礫を含む崖状となっている。特に突出するあたりは後背の山からの出水によるのであろうか大きく抉り込んで崩壊している。そしてこの突出部によってかかれるあたりの山際に自然石を用いた石段が6段遺存していて、西側の字本家や字屋敷余りの宅地から上段のフラット面へ登る路であったと判断された。

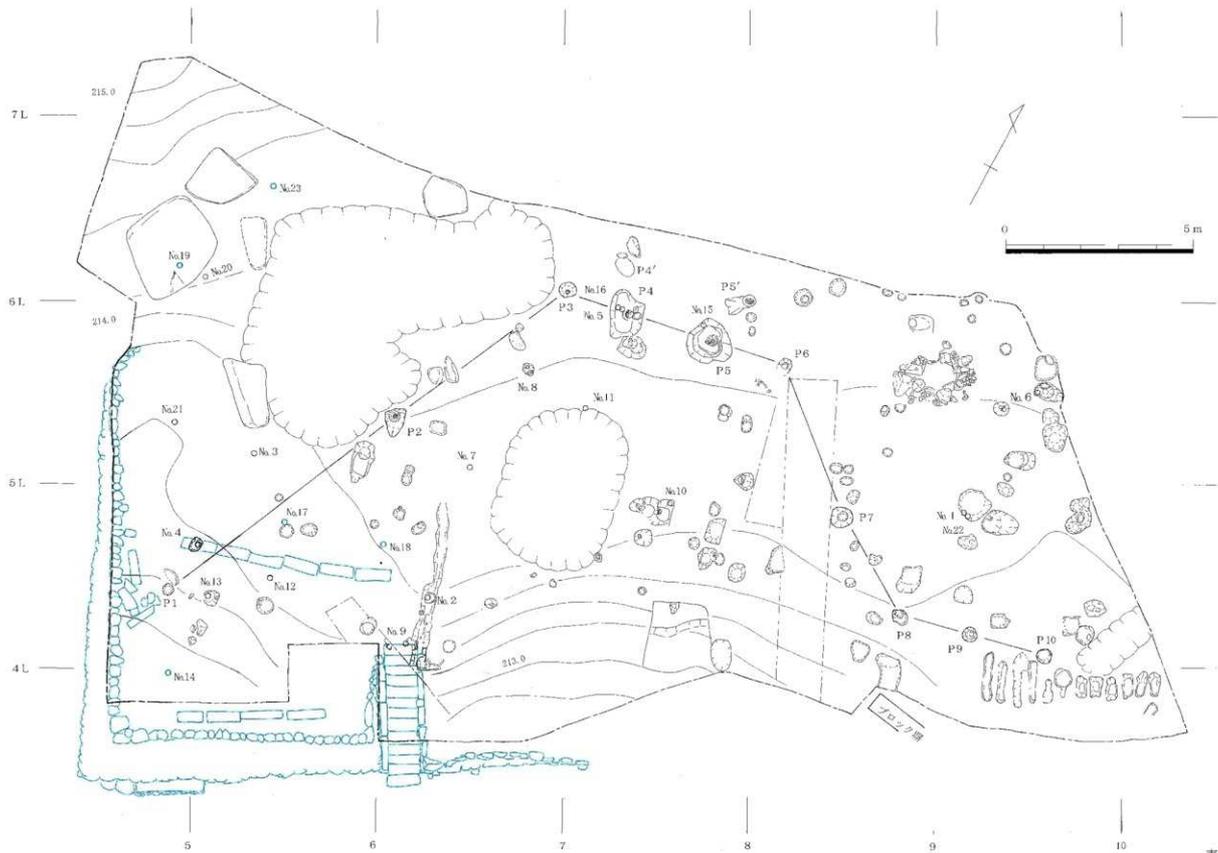


図6 上段 遺構図

青色図は近世遺構

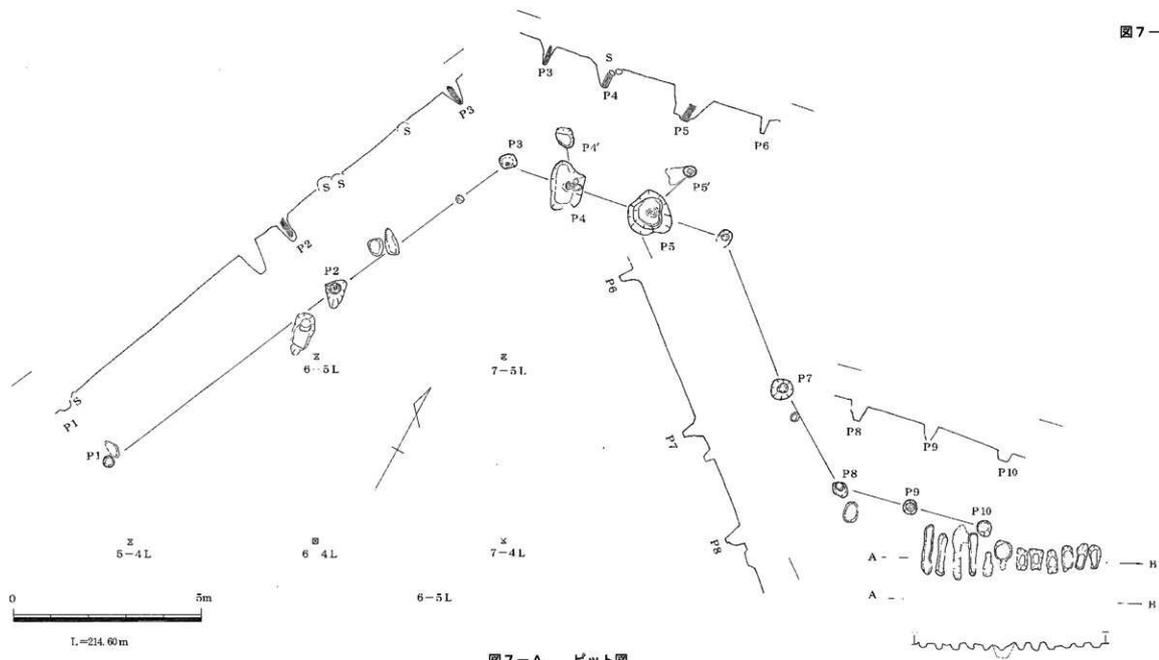


図7-A ピット図

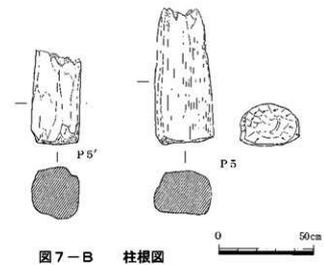


図7-B 柱根図

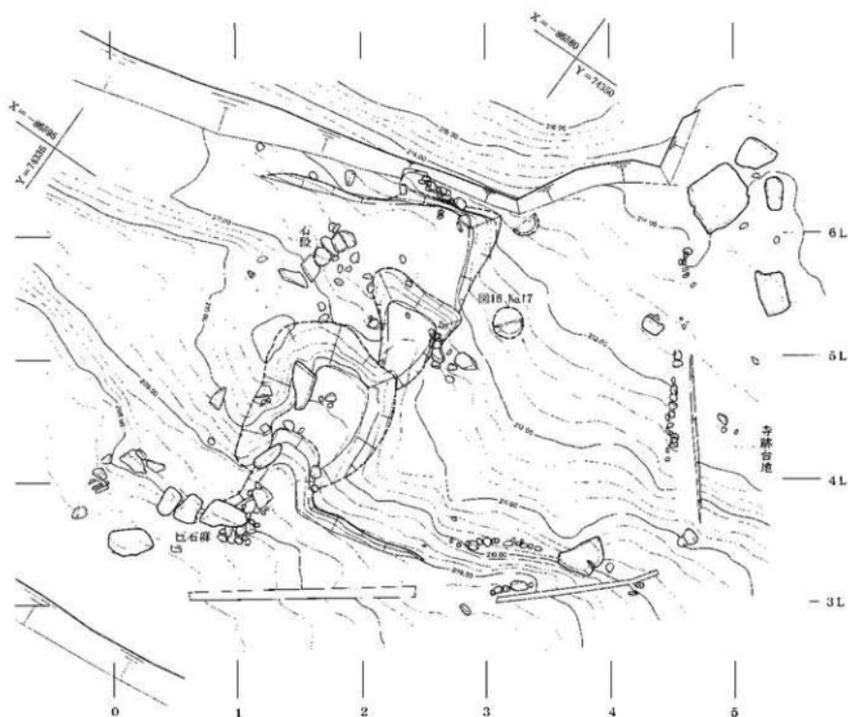


図8 巨石群と石段(Ⅱ区)

## 2. 遺物

検出した遺物の多くは上段Ⅰ区の埋め立て土中からである。

特に2次面の石垣で囲った範囲とその東隣接で常民の用具ではない青磁、天口、仏具などの破片が認められ、またカワラケ(土師質坏)の細片も混入している。

上段Ⅱ区では山際近く、近世末～近代のキセル片や砥石など数点の検出にとどまる。

1は中世陶器の一窯、珠洲焼きの特徴を持つ甕の頸部である。外面には工具による特徴的なタタキ痕が3mm前後の間隔で入り、内面はナデ仕上げである。焼成は良好である。

2、3は須恵系の破片であるが残存部少なく器種は不明である。双方とも外面に亀山焼きの特徴である格子状のタタキが認められる。内面調整は2が指頭瓦、3はタタキである。焼成は、2は普通だが3はやや不良である。

4、5は須恵系統の陶器である。4は残存部少なく器種は不明であるが叩き締めで成形されている。内面には中世備前焼の播鉢に見られる様な交差するクシメ文のパターンが認められるが、

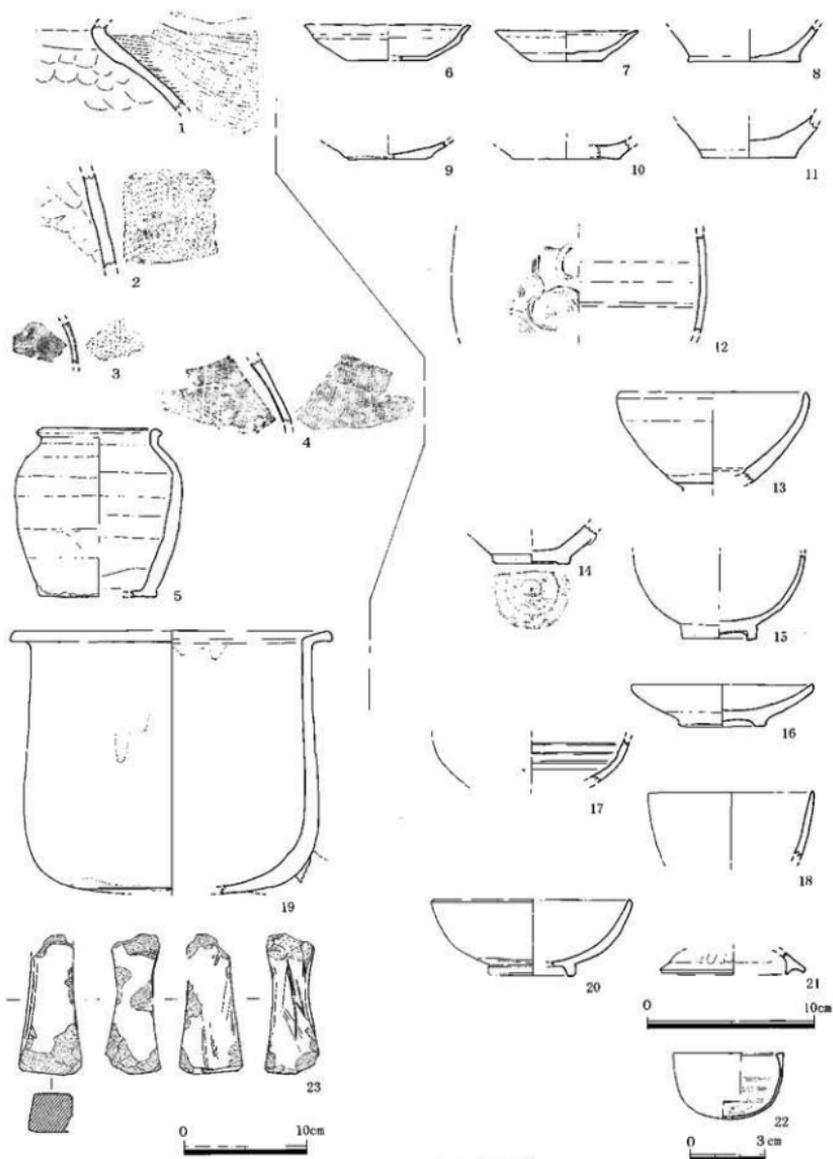


图9 上段出土遗物

軟質で焼成はあまり良くない。5は口径10cm、器高13.7cmを測る小型壺である。ろくろ成形の後、外側胴部から底部にかけヘラで粗く削られており凹凸が目立つ。焼成は硬質に焼き締められ色調も還元色を呈しているが形態や調整は中世備前焼の特徴を備える。

6は須志質土器の小皿で口径10cm、器高2.2cm、底径4.6cmを測る。色調は白く水焼けた所と灰色の還元色が見られるが焼成は不良で表面風化が著しい。底部はヘラ切りである。

7～10はカワラケ（土師質坏）である。7は口径8.6cm、器高1.9cm、底径4.2cmを測る。内側底部と、外側底部から側面にかけて黴斑が認められる。また外側底部の表面風化が著しい。8は底径6.6cmを測る。胎土に1mm程の砂粒を含み焼成はやや甘い。底部に回転糸切り痕が確認出来る。9は底径4.7cmを測る。1mm以下の砂粒を含み焼成は普通だが表面が風化し磨耗している。底部は回転糸切りである。10は底径6.6cmを測る。1mm以下の砂粒を含み焼成は良好である。

11は土師器の底部で底径は5.6cmを測る。2mm程の砂粒を含み焼成は普通で、底部はヘラ切りである。

12～14の3点は常民の生活用具とは異なり、特権階級に位置する城主や寺僧などが格別な使用目的に所持していたものである。12は13～14世紀頃中国で作られた青白磁瀟文瓶<sup>81</sup>の一部である。一般に「梅瓶」と呼ばれる形態の瓶で当時の奢侈品のひとつである。斐伊川を数百メートル下った原田遺跡でも数片が出土している。13、14は天目茶碗である。13<sup>82</sup>は口径11.2cmを測るが高台部分は破損していた。内外面ともに茶褐色の鉄釉が施され、室町時代中国からの渡来品と思われる。14<sup>83</sup>は底径4.4cmを測るが口縁部分は欠損していた。粘性の強い鉄黒釉（天目釉）が一部、高台底部まで厚く流れ滴るように止まっている。高台内にはヘラで削られた縮緬織（椎茸高台）が確認出来、器内の茶溜まり部辺りには、茶筌痕と思われる微細な回転糸が幾筋も走る。

15は青磁<sup>84</sup>の茶碗である。江戸中期頃の美品で、全体に薄く小振りで作られており高台の底には一部釉薬が付着している。外面には、ほんのりと薄紅色を帯びた中世炎焼成の反応が見て取れる。

16～18は唐津系の陶器である。16は唐津焼の特徴を持つ小皿<sup>85</sup>で17C前半の所産と思われる。口径10.8cm、器高2.5cm、底径5.0cmを測り高台の際には油のしみ痕が残り灯皿への転用品かと思われる。17は唐津系の壺<sup>86</sup>の陶片である。施釉は外面のみされおり内面は無釉でロクロ成形による回転痕が認められる。18は口径9.8cmを測る唐津焼き<sup>87</sup>の雑器の陶片であるが残存部少なく器種は不明である。内外面とも薄く掛けられた釉薬には貫入が幾筋もはいる。

19は19世紀頃の布志名焼き<sup>88</sup>である。口径25.0cm、最大胴径23.8cmを測る。外面は白化粧され、透明釉と来待石（凝灰岩質砂岩）を主成分とする釉薬が掛かるが内面は施釉されておらず、形態などの特徴もあわせ仏具の「呑立て」と思われる。

20は陶器の碗である。口径11.8cm、器高4.6cm、底径5.0cmを測り黒暗褐色の釉薬が施釉されており雑器と思われる。

21は青白磁の蓋の一部である。身は急須か土瓶であろう。

22は携帯用仏教楽器の引磬で、その柄状の小鐘部である。口径4.4cm、厚さ1mm程の金属製で丸底中央に木の柄を紐でくくり付けるための2mmほどの穴が認められる。

23は砥石である。石質は悪く細砂粒を含む粒度が不揃いな凝灰岩である。四面とも使用していた痕跡が残るがどの面も中央部の減り方が顕著で鎌など湾曲した刃物を研いだことが見て取れる。

これらの特徴は近世から近代の農具用砥石に普通に見られる。

門柱に比定した柱穴P3、P4に遺っていた柱根についてみる。(図7-B)

いずれも樹種はクリ材で地中部分では25～30cm略方形に粗く削り整形したもので、根端は斧切りであるが尖らせず平坦に整えている。P4柱根の<sup>14</sup>C年代は、別項のように1439～1475年と測定された。

## 註

※1・2・5・6・7 島根県埋蔵文化財調査センター 西尾克己氏のご教示による

※3・4・8 横田町小馬木 内田寛一氏のご教示による

## 参考文献

島根県教育委員会「原田遺跡1区」他『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財報告書4』

## 上段出土遺物

図No.	種別	器種	出土地点	出土層
1	珠洲	甕	9-4L	流入土層
2	亀山	不明	6-4L	〃
3	〃	〃	5-5L	〃
4	築東系	〃	7-5L	〃
5	〃	小壺	9-5L	〃
6	須恵質	小皿	6-5L	〃
7	土師質	カワラケ	6-5L	〃
8	〃	〃	6-4L	〃
9	〃	〃	7-4L	〃
10	〃	〃	7-5L	〃
11	土師器	不明	5-4L	〃
12	青磁	青白磁湯文瓶	5-4L	表土層
13	陶器	天目茶碗	4-4L	〃
14	〃	〃	4-3L	〃
15	青磁	茶碗	7-5L	流入土層
16	唐津系	小皿	6-5L	〃
17	〃	〃	6-5L	表土層
18	唐津系	壺	4-6L	〃
19	陶器	菅立て	4-6L	〃
20	陶器	碗	5-6L	流入土層
21	青白磁	蓋	7-5L	〃
22	仏教楽器	引磬	9-4L	〃
23	砥石	農具用砥石	9-4L	表土層

## B 下段地

### 1. 遺構 (図10、11、12)

町道前布施線に沿った帯状の平坦部分で、民家の宅地となっていた地点である。宅地造成の際の盛土を除くと、大型の柱穴群があり、柱根を伴うものもあった。また調査区内西側の若干高い地点には地表近くから1.5×1.2mほどを浅く削り込んで礫石を敷いた炉状の焼土遺構があった。

炉状焼土遺構：やや粘質の地山に、北から南へ3mほどの間に70cmほど下る、やや緩やかな斜面地形につくられた遺構である。そのほぼ中央あたりに、幅1.5m長さ1.2m略方形で深さ約40cmほどスプーンで掘り取ったような形に掘り込んで底床面とし、さらに前端に直径40cm余りのほぼ円形の掘り込みをつくっている。

床面は強く焼けて固く、粉炭や炭が付着していて、その上に人頭大～拳大の礫が敷き詰めであり、いずれも強く被熱してしかもヒビ割れている。これは熱した石に水をかけて蒸気を発生させることを繰り返した結果とみられる。

類似する当地の民俗事例からして、桶を逆さに伏せて行う麻蒸しの炉跡と判断され、近世末～近代の所産であろう。

柱穴ピット群： 下段の大形柱穴ピット群は丘麓の平坦に移るアクセント部にあり、上段の虎口状柱穴列（門跡）のほぼ直下にあたる位置である。

柱列プランはほぼ東西方向で極く接近して2列あり、別にそれにほぼ直交する小柱穴列が川方向へ1列と、川に近く東西方向にも4穴が認められた。

各柱穴との間隔等についてみると次のようである。

第1の列はP13A(1.2m) P14(3.3m) P15(1.2m) P16で、残っていた柱根部は、P13Aは直径28cm残存長80cm、P15は直径34cm残存長77cmであり、いずれもクリ材で底面は平らに斧で整えている。

第2の列はP13B(2.7m) P22(3.3m) P24(0.9m) P17(2.3m) P23である。残っていた柱根部は、P23は直径30cm残存長100cmで根端は曲りを削ったためやや尖り気味である。P17は直径25cm残存長118cmで根端は平面整形としている。そしてこのいずれれもがクリ材である。P17柱根の<sup>14</sup>C年代はA.D1520～1580年と測定された。このほか東隣接のゴミ溜め中にも同様の柱根部が混入していて、直径25cm残存長87cmで、これもクリ材である。

この第1、第2列のうち間隔最大の部位はいずれも3.3mで、しかも太くしっかりした柱材であることから、塀の一部に設けられた門扉部であったと考えられる。

第3の列は下段調査区西端近くにあり、P1(6.6m) P2(6.6m) P6のほぼ東西方向一直線で、それぞれ直径70～90cmの大形のピットであるが柱根等の残存物はなかった。急斜面の下端に位置するが塀等か否かは不明である。

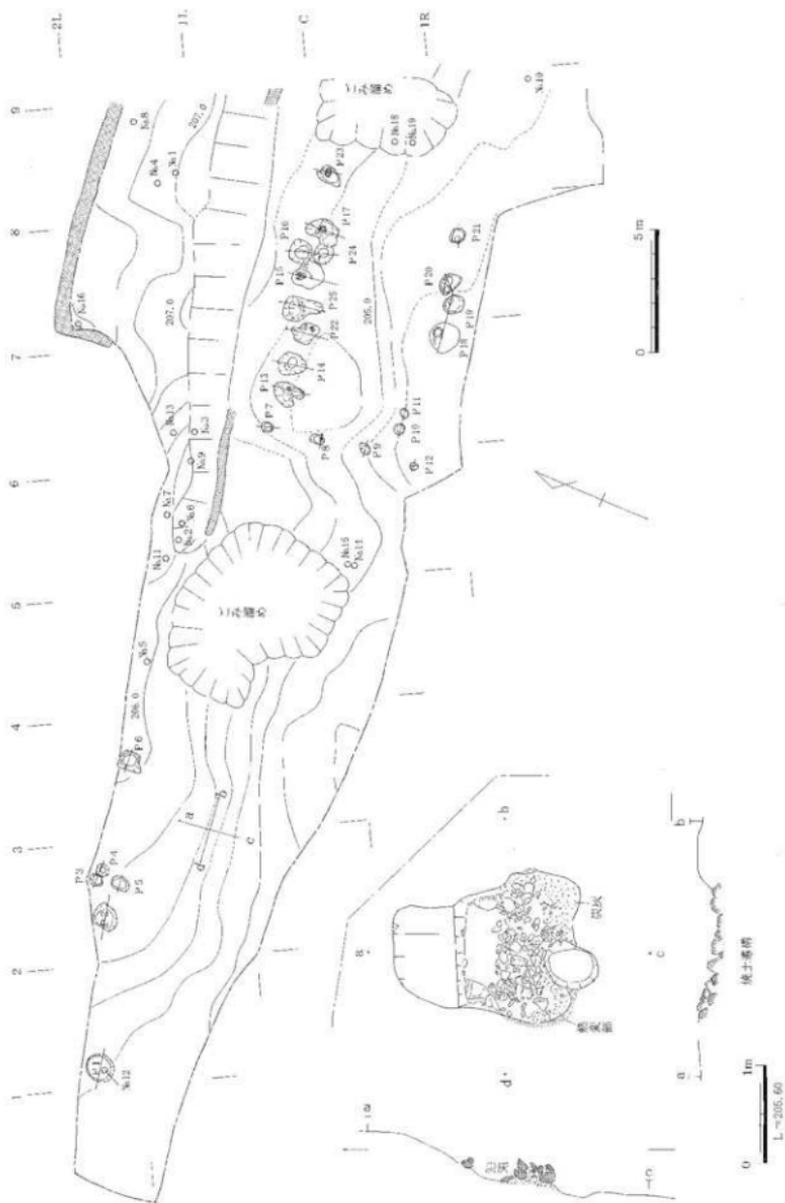


图10 柱穴配置と焼土遺構

またP2の近くには小さい柱穴P3、P4、P5が近接してあるが、規格性はないようだ。

第4の列は第1の列に近く、ほぼ北から南へP7(2.1m) P8(2.0m) P9(2.0m) P12である。各柱穴ピットの大きさは上記よりやや小さく、直径30~40cmで深さもやや浅い。

第5の列は3穴で第1、第2の列にほぼ平行するが南へ約6m隔てである。

P18(2.0m) P20(2.0m) P21の3穴で、皿状に広く浅い堀り方の西へ北西に偏って直径17cmほどの柱根であったようだ。

なおP20の直近かにP19があるが、規格性は判らない。

このほか、下段調査区東端の古代土器溜まり遺構の中に、第1の列又は第2の列の延長上かと思われる柱穴と柱根を検出したEP1とEP2である。間隔は1.8mで1間に換算される。この柱根の<sup>14</sup>C年代はAD1520~1600年及び1640~1670年で100年近い差が測定された。

これらの柱穴ピットはやや低湿などところの粘質地山に掘り込まれており、大きい柱穴の底には扁平な石や木板などの礎板が敷かれているものがあり、次のようである。

礎板に石を用いたもの：P16

木板を用いたもの：P25、P22

また柱材は概ねピットの北側に添わせてたてられており、ピットの堀り方は南がやや緩斜する堀り方であることから柱立ては南側からときに副木を滑らせながら斜めに挿入し、北側壁面に当てて山手側(北)へ引き起す手法であったと考えられる。

そして南側の広い隙間には石疎等を詰めて根部を固定し、然るのちピットを埋め戻している。

副木残存ピット P24、P25、P8

詰め石のあるピット P22、P24、P18、P19

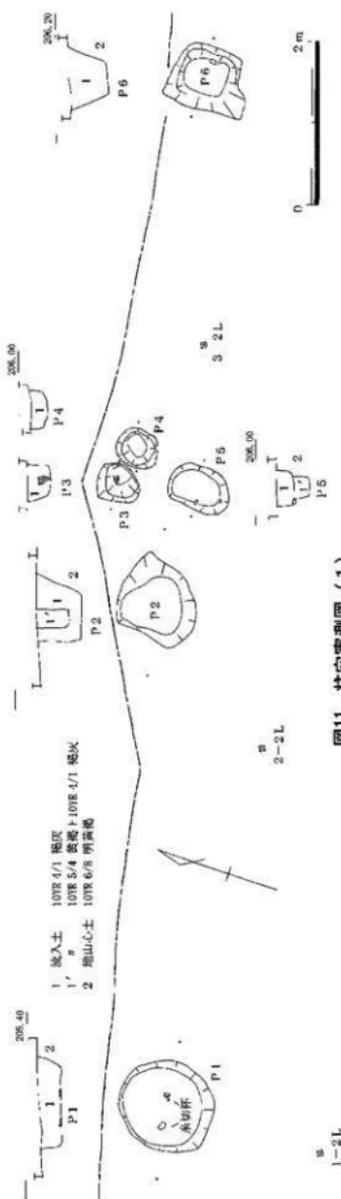
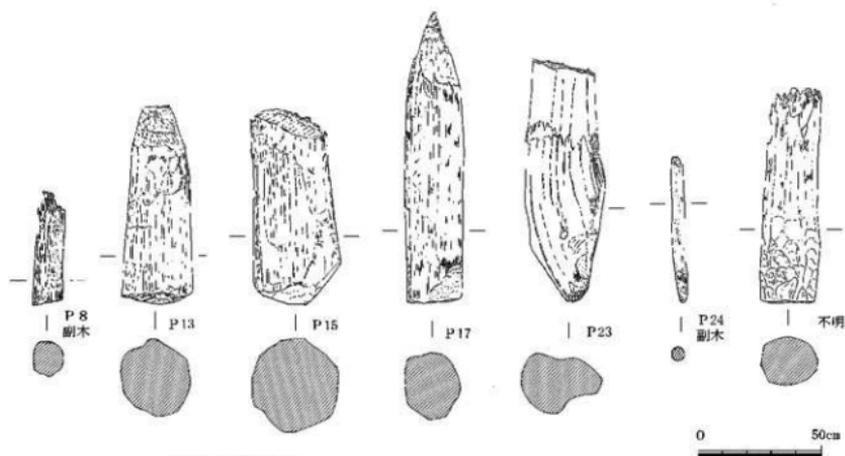


図11 柱穴実測図(1)





上器溜り遺構内山上

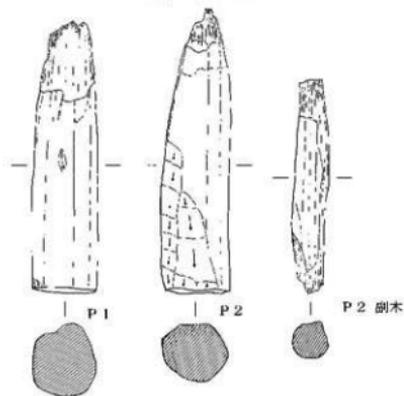


図13 柱根 図

## 2. 遺物 (図13、14)

下段地は近世に隣宅地造成に伴って旧表土の多くは除去されていて、柱根以外の検出は極く小数である。しかし、上段地との間的小テラス等を含む斜面の表土中からは、須恵器片をはじめ中世陶器や土師器片などを採取した。

その大部分は調査区東半分に偏っており、上段は調査区外ながら寺城整地の際に削りどろした埋土中と判断される。

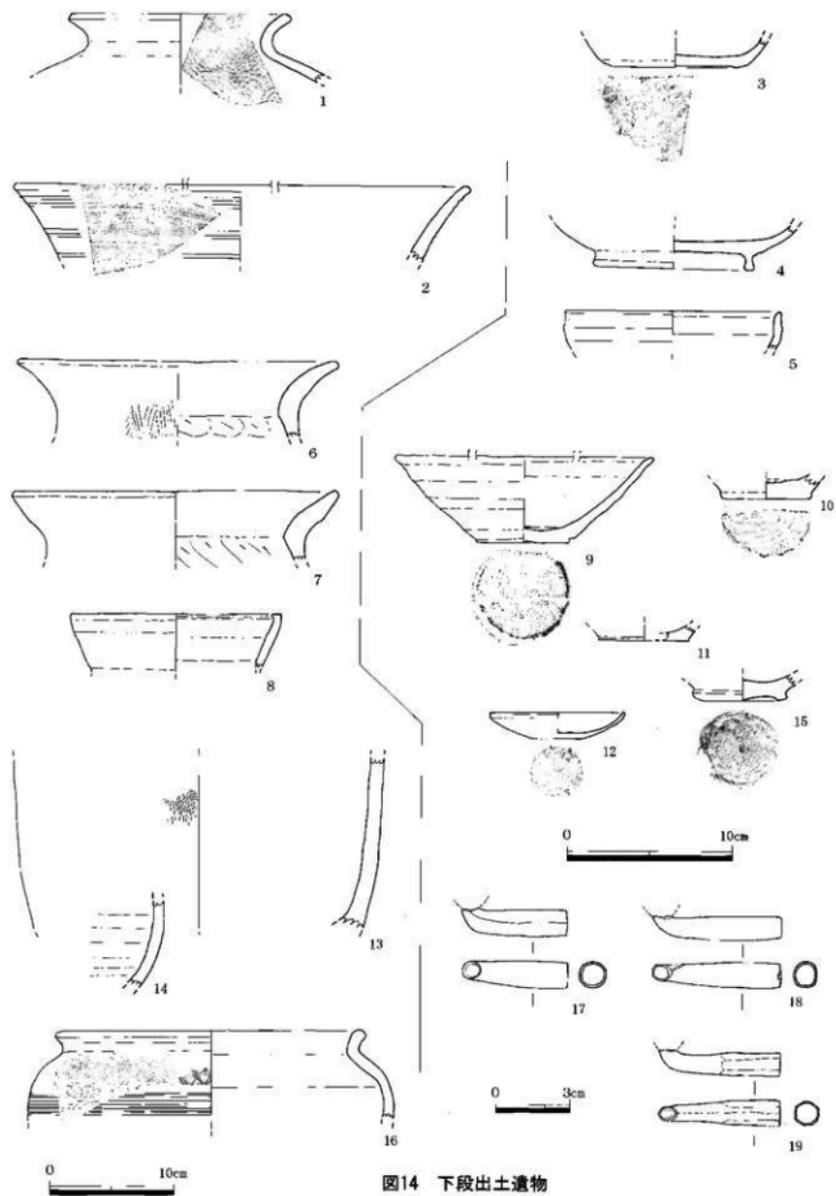


图14 下段出土遗物

1～5の5点は須臾器である。1は大甕で口径17.8cm、頸径14.8cmを測る。頸部から口縁にかけ強く外傾しており、内側にはタタキによる痕跡が認められる。口縁の一部と胴部に自然釉が掛かり硬質に焼かれている。2も大甕で口径は約35.8cmを測る。外面には7条の波状文が確認出来、内面は回転で仕上げである。焼成は良好である。

3、4は器種不明である。3は底部のみの残存で底径7.4cmを測り、焼成は良好である。4は付け高台が認められるが、残存部少なく皿であるか壺であるかは不明である。底径9.2cmを測り焼成は良好である。5は碗の口縁部分である。口径12.8cmを測り焼成はやや甘い。

6～10は土師器である。6は甕の口縁部である。口径25.2cmを測り、焼成は良好である。7も甕の口縁部で口径25.6cmを測る。焼成は良好で外面に煤が付着している。8は口縁部であるが器種は不明である。口径17.0cmを測り、焼成はやや悪い。内外ともに丁寧な仕上がりで、口縁内側にふくらみがある。9は壺である。口径は不明だが器高5.3cm、底径5.4cmを測り、内外面に所謂丹塗りと思われる顔料が少量付着している。底部には回転糸切り痕が確認出来る。10は底部の破片で底径5.2cmを測る。回転糸切り痕が認められる。

11、12はカワラケ(土師質灰)である。11は底部のみの残存で、底径5.4cmを測り回転糸切り痕が認められる。焼成は良好である。12は灯明皿である。口縁の内外面に煤が付着している。口径7.9cm、器高1.6cm、底径2.8cmを測り底部は回転糸切りである。

13は中世の壺器系の甕である。内外面とも粗い仕上がりになっており凹凸が目立つ。鉄分を多く含み硬質に焼かれている。

14は17世紀の唐津焼き<sup>※1</sup>の破片である。無釉の胴部で残存部少なく器種等は不明だが、焼成は良好で10mm程の厚みがある。

15は陶器の底部で唐津焼き<sup>※2</sup>と思われる。高台は、不均一に削られ中心にささくれ状の皺のよった所謂、椎茸高台である。

16は江戸期の備前などの模倣品<sup>※3</sup>と思われる無釉陶器である。口径23.8cmを測り肩に櫛描波状文とその下胴部に6状の櫛描沈線が巡る。焼成は良好で酸化炎焼成である。

17～19は煙管の雁首部である。いずれも近代の所産で火皿、羅字、吸口は3点とも欠損していた。17は全面に緑青が付着しており、銅製かと思われる。残存長が4.4cmで、湾曲することなく延びた雁首は先端でほぼ直角に立ち上がり火皿部へとつながる。この特徴は近代に入ってから見られるものである。18の雁首の形状も同じ特徴を持つ近代の所産で、残存長は5.2cmを測り鉄素材のようである。19の残存長は4.9cmである。銅製と思われる素材の上に鍍銀が施されているが所々剥げ落ち錆が付着している。

## 註

※1、3 鳥根県埋蔵文化財センター 西尾氏のご指示による

※2 横田町小島木 内田寛一氏のご指示による

### 下段出土遺物

区No.	種類	器種	出土地点	出土層
1	須恵器	大甕	8-1L	表土層
2	#	#	5-1L	#
3	須恵器	不明	C-6	#
4	#	不明	8-1L	#
5	#	碗	4 1L	#
6	土師器	甕	5-1L	#
7	#	#	5-1L	#
8	#	不明	8-1L	#
9	#	甕	6-C	#
10	#	不明	8-2R	埋土層
11	#	カワラケ	5-1L	表土層
12	#	#	1 2L	埋土層
13	須恵系	甕	6-1L	表土層
14	唐津	不明	5-1R	埋土層
15	唐津	茶碗	5-C	#
16	江戸備前	甕	7-2L	表土層
17	喫煙具	キセル	上段3-5L	#
18	#	#	8 1R	#
19	#	呑立て	8-1R	#

### C 上・下段地の総括的検討 (図15)

調査区域を大きく上段地と下段地及び、その間の斜面部分とに区別して記述したが、その主たる事項は中世を中心とする原地形に沿った柱列と若干の陶磁器及び、仏具の断片であった。

呼称地名である円満寺については、敷地を大きく改変して石垣で区画し石段を畳むなどの構えは、近世以降のものであって、より以前の位置的確認は出来なかった。しかし引磐や梅瓶或いは大目茶碗などの破片は、この近世の敷地改変に伴って削り均らした土層の概ね東寄りに混入が認められることから、中世の寺跡は上段の調査区外東側近辺の宅地あたりと見当付けされる。

調査区内東寄りでは中へ小の柱穴ビットを検出したが、その多くは埋め戻されている。規則性の認められるのは上段前地の地形にそった1列のみであり、その中心となる太い柱根は15世紀半ばの14C年代が与えられた。これは凹入する門構えの正面に相当する門と、それに続く横矢掛け状に屈折する塀の主柱列と判断される。そして寺院の門塀と云うより、むしろ中世城郭の麓部につくられた木戸(城戸)かと思われる。

下段地は中世においては斐伊川本流が大きく迂曲する攻撃面上の狭いや平坦な面である。上段からの落差約9mで、その間の斜面は急である。なおこの斜面は上方からの崩落～投下土や部分的な階段状掘削によって著しく攪乱されていて、遺構は検出できなかったが主として土師質系土器片が若干や、また錆土で団子状に固結した拳大以下の鉄滓があり、これについては後述するが下方の土器溜り内にも混入が認められ、中世以前の所産と考えられる。

下段地では大形柱根を含む門跡とみられる遺構が上段のそれに対応する様相で検出され、その



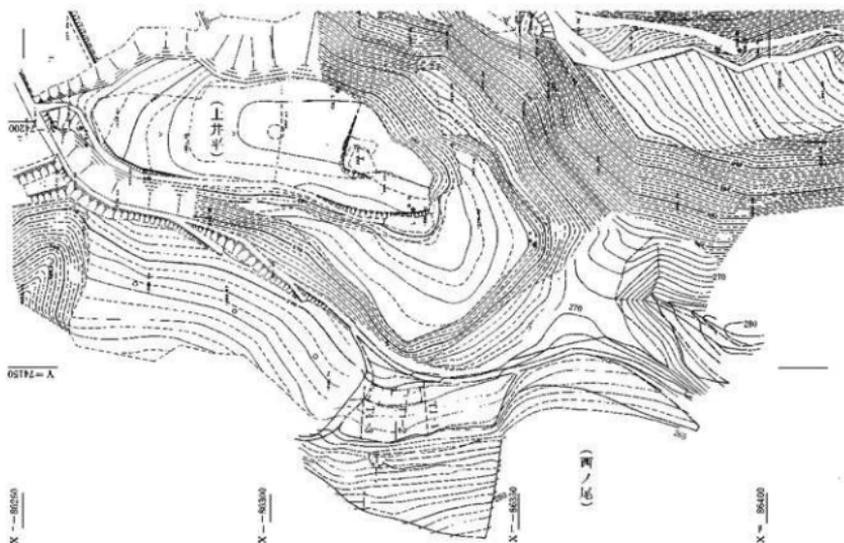


図16 土井平地区 地形図

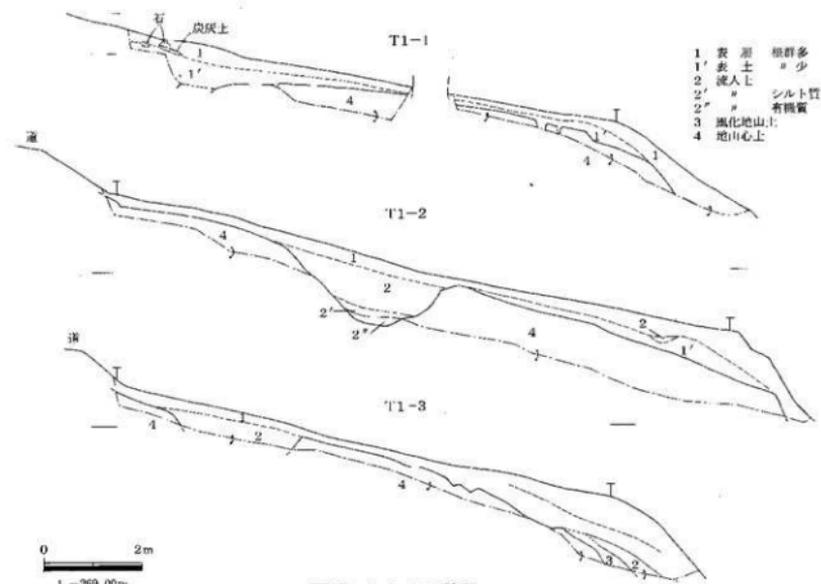


図17 トレンチ壁面

## V まとめ —中世を中心に—

調査遺構の各地点については既に述べた如く、15～16世紀の大形柱列で、いずれも門構えを検出した。しかし寺跡そのものについて確実な遺構は検出し得なかった。検出遺構はいずれも後背山頂を中心とする中世山城の縄張り構成を強く指向していると考えられる。

発掘成果は一部分にすぎないが、付近一帯について、現況地形図上に城跡踏査や小字地名等を加え、中世後半期を想定して景観の復元を試みてまとめたい。

峻立する山頂に立地する城跡は“水ノ手城址”と呼ばれ、小字地名「要害」の狭い尾根上に占地する帯状の主郭から南へ下る郭群が配置され、その下端部に円満寺遺跡上・下段の門構え構造が位置する。この郭群の西隣やや低い丘頂は小字地名「土井平」で居館跡と推定され、その南端は広大な堀切りで尾根を切断し、横堀りも認められた。この二つの間に狭く深く入る谷間は小字地名「殿迫」と呼び、谷口部には麓館かと思われる「古屋敷」「本家」などの地名の宅地域がある。此所からは調査した上段の門跡へと接続する。下段から上段の門へと登ると、その右手にあたる字「寺畑」あたりに中世の円満寺が位置するものとみられ、それから山裾ぞいに字「引手」（大手路の意か）が副郭群へとつながる。

また「土井」から大堀切を経て南西へ長く延びる尾根は「西ノ尾」と呼び、その先端が斐伊川岸へ下るところには「西ノ尾砦」と堀割りの虎口があって、先年調査を行なったところである。

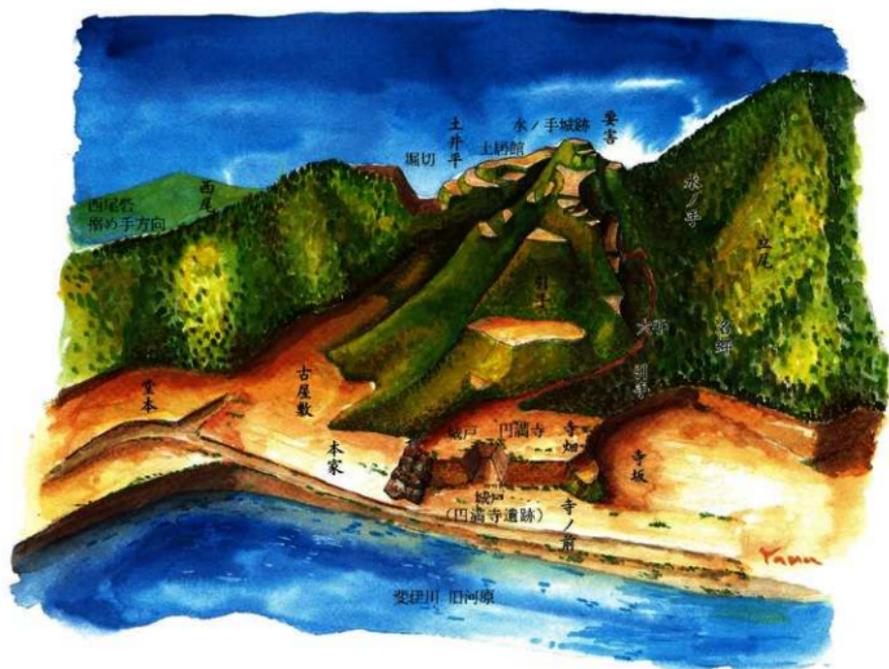
「要害」の東側も南へ下る尾根があり、字名が「立尾」と呼ばれていて、先端部は集落東端に下る地形である。

このように「要害」から南前方へ八字状に、西は「西ノ尾」の尾根、東は「立尾」の尾根によって区画された縄張りが推察され、その間の麓部川沿いに麓館や寺院（円満寺）を核とする前布施の小集落が形成されたのであろう。（イラスト図参照）

文献等からこの集落を含む城域の形成は後背台地上の上布施地区を拠点とする布施氏によるもので、のちには三沢氏の麾下に属するところであったことが分かる。

### 参考文献

- 1) 山根正明：『山雲国伊志見郷故地の景観復元について、『現地調査の方法による中世村落・民衆像の再検討—地名資料の収集・可視化と科学的分析—』科研報告書 平成16年
- 2) 『三刀屋氏とその城跡』同 調査会編 福庭書店 昭和60年
- 3) 武光 誠：『地名から歴史を解く方法』河出書房新社 2002年
- 4) 服部英雄：『小字地名による中世の村の復元』『歴史公論』086 地名と日本史 』雄山閣 昭和58年



(毛筆体は小字地名)

中世景観 イメージ図

# 圖 版

PL1



水ノ手城跡  
と  
円満寺遺跡  
(南から)



円満寺遺跡遠景  
(南東から)

水ノ手城跡と円満寺遺跡

調査前

ピット群  
(北から)全 景  
(上空から)

上段I区(1)

PL3



柱穴群 (北から)

P 3



P 5



P 4



丸太敷の跡

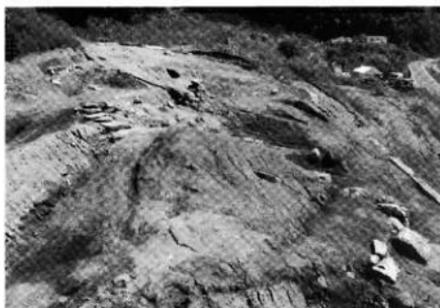


P 5'

上段 I 区 (2)



全景  
(南から)



全景  
(西から)

右段



上段Ⅱ区

PL5



大形ピット群  
検出状況



同  
半裁状況



同  
完掘状況

下段の遺構（1）



P13



P 8



P16



P15



P22



P17



P23

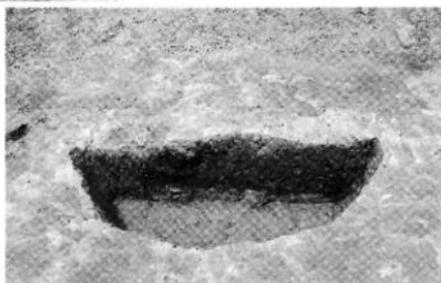
下段の遺構 (2)

PL7



炉状焼土遺構

P 1



P 2



P 6



下段の遺構 (3)

I-1トレンチ



I-2トレンチ



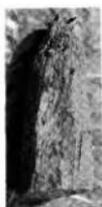
I-3トレンチ



柱根



上段 P5



P13



P15

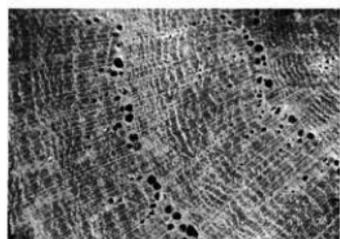


P17



P23

下段



クリ材 (顕鏡)



P1



P2



P2副木



上段 P5



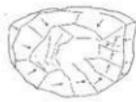
P1



P2



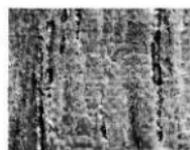
(拓本)



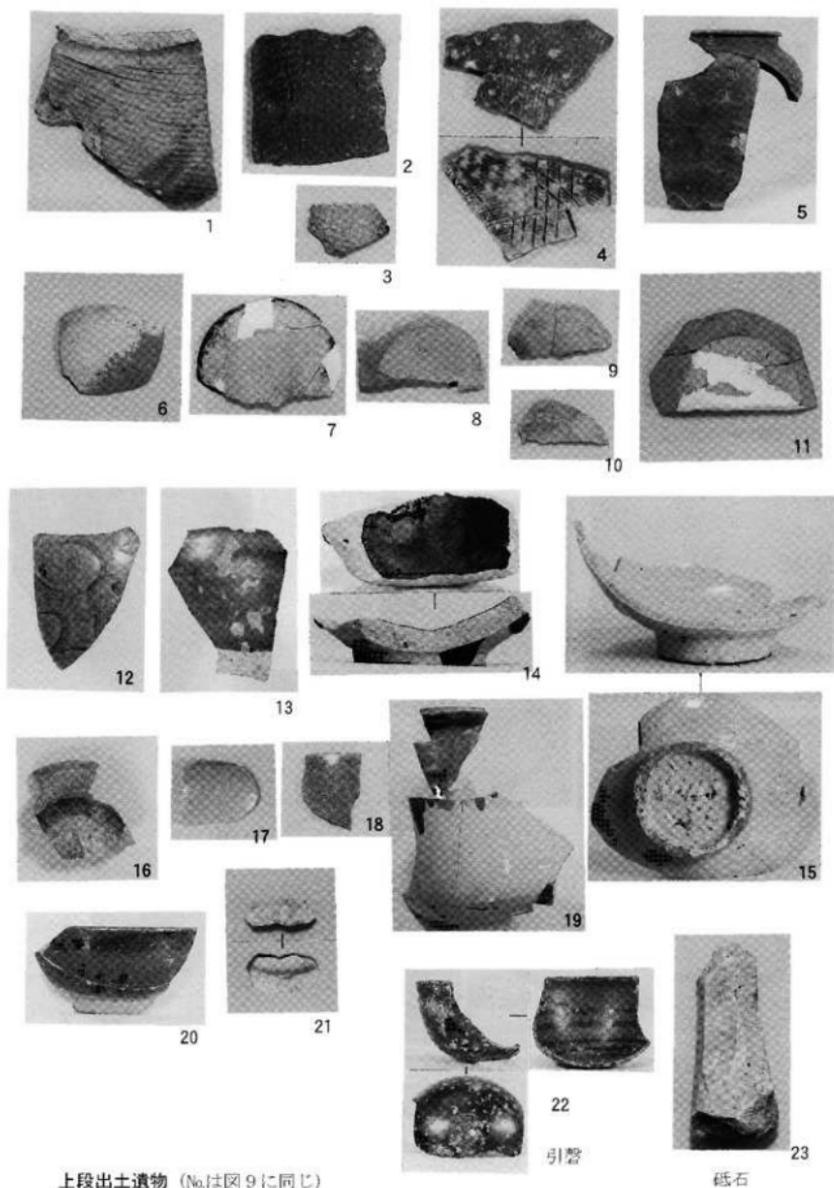
(なた目方向)

柱根底面

上器溜り遺構内



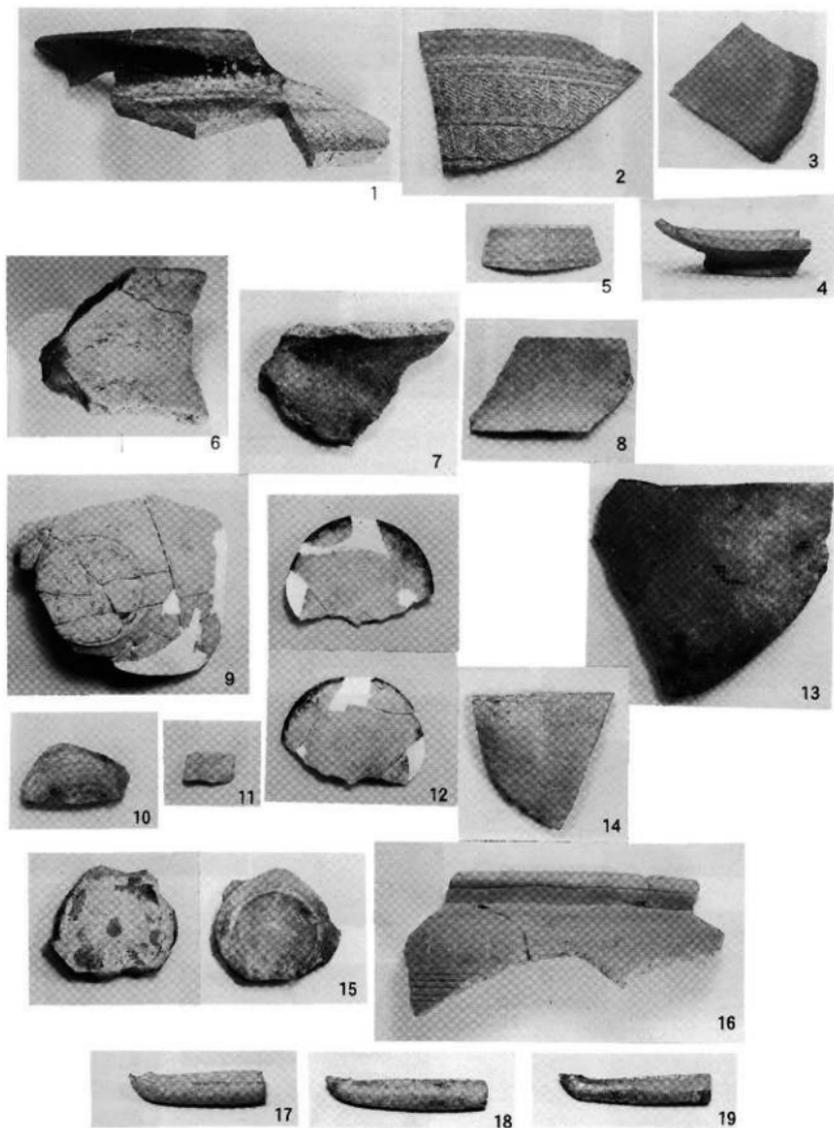
(柱目顕鏡)



上段出土遺物 (No.は図9に同じ)

砥石

引箸



下段出土遺物 (No.は図14に同じ)

円満寺遺跡 I (中世編)

尾原ダム建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書IV

2005年3月

発行 仁多町教育委員会  
〒699-1511 島根県仁多郡仁多町大字三成358-1  
Tel.0854-54-2540

印刷 (有)木次印刷  
島根県雲南市木次町里方84番地34